樋口達哉／あこがれ Ti adoro

ART INFINI

テノールの貴公子樋口達哉がフルオーケストラと共に昇陽する。
光り輝く13のオペラ・アリア・ジュエリー。

1. ヴェルディ：『アイーダ』～"清きアイーダ"
2. ヴェルディ：『リゴレット』～"あれかこれか"
3. ヴェルディ：『第1回十字軍のロンバルディア人』～"私の喜びを"
4. プッチーニ：『トスカ』～"妙なる調和"
5. プッチーニ：『マノン・レスコー』～"見たこともない美人"
6. グノー：『ロメオとジュリエット』～"あぁ、太陽よ昇れ"
7. チレア：『アルルの女』～"フェデリーコの嘆き"
8. チレア：『アドリアーナ・ルクヴルール』～"心は疲れて"
9. ヴェルディ：『マクベス』～"あぁ、父の手は"
10. ジョルダーノ：『フェドーラ』～"愛さずにはいられないこの想い"
11. ジョルダーノ：『アンドレア・シェニエ』～"ある日、青空を眺めて"
12. レオンカヴァッロ：『道化師』～"衣裳をつけろ"
13. プッチーニ：『トゥーランドット』～"誰も寝てはならぬ"
14. 村松崇継：いのちの歌

2017 12/6
ON SALE

MECO-1046 定価¥3,000+税

SACDハイブリッド盤（DSDレコーディング）

SUPER AUDIO CD　DSD Direct Stream Digital　Stereo DSD Recording　HYBRID

樋口達哉（テノール）　鈴木織衛（指揮）　仙台フィルハーモニー管弦楽団

©アールアンフィニ

アールアンフィニ　企画制作：（株）ソニー・ミュージックダイレクト　発売：（株）ミューズエンターテインメント

TATSUYA HIGUCHI
あこがれ
Ti adoro

日本を代表するトップテナー、樋口達哉が贈る綺羅星の如く輝く13のオペラ・アリア・ジュエリーです。共演は肝胆相照らす盟友、仙台フィルハーモニー管弦楽団。フルオーケストラとの3日に渡るセッションレコーディングという、まさに贅を尽くした入魂のアルバムです。イタリア・オペラ・アリアを中心に織りなす豪華絢爛たるその響きは、テノール歌手樋口達哉の熟成した「今」を刻印する垂涎のアルバムです。

樋口さんのどこまでも続く歌声の響きと輝き、そして力強さはプリモテノールならでは。やっぱり、すごい。Bravissimo!
―――― コシノジュンコ

樋口さんの声は、軽やかなテノーレ・リリコから、力強いテノーレ・スピントになった。その声に導かれて、歌の世界に引き込まれてしまう。本当に素晴らしい。
―――― 三枝成彰

樋口君とは、十数年のお付き合い。年を重ね、その美声も熟成し更に深みを増して来ました。これからも目が、いや耳が離せません。
―――― 辰巳琢郎

待望のニューアルバム！ 美しく、激しく、甘く、切なく、あの名場面が蘇る。私をお姫様にしてくれる樋口達哉に、酔いしれます。
―――― 山田邦子

シャンパンテノール！どこまでものびやかで、輝ける黄金色の歌声
―――― 山本益博

テノール 樋口達哉の未来に寄せて ―――― 岸純信（オペラ研究家）

テノール樋口達哉の舞台姿は、彼が新国立劇場の《ウェルテル》に小さな役で初登場した頃から目にしているが、見る見るうちに大役を手掛けるようになり、青年のキャラクターから大人の男の人物像まで、ステージでの存在感は年々、いっそう華やかなものになっている。

彼のキャリアには幾つかの転機があったという。例えば、28歳で《ラ・ボエーム》のロドルフォを歌ってヨーロッパ・デビュー（ブダペストのハンガリー国立歌劇場にて）を果たしたという輝かしいスタートも、その一つである。このデビューは、実は、彼がミラノに留学していた時に舞い込んできた幸運であった。当時の樋口は、伝統あるミラノ・スカラ座の合唱団員として忙しく活動していたが、その合間に、東京国際声楽コンクールが開催されたので帰国して挑戦してみたところ、見事に入賞。副賞として、ブダペストの歌劇場の本公演で主役を演じるという機会がもたらされたのである。

この時、樋口はハンガリーに一ヶ月まるまる滞在しながら、様々なことを考えたという。「スカラ座の事務局に、合唱団の仕事を休む許可をきちんと貰った上でハンガリーに行きましたが、そこでやはり、自分が本当にやりたいのはソリストとしてオペラの舞台に立つことだと実感しました。でもオペラの殿堂スカラ座で合唱団員の職を得ている・・・どちらが良いのかと、それは悩みました。《運命の力》では、マエストロ・ムーティから、小さなソロのある役を頂けたこともあって・・・」。

そこで彼は、ハンガリーから戻ってさらに一年、スカラ座の合唱団で舞台経験を積んだ上で、日本に帰ろうと決めたのだという。帰国後すぐに新国立で《ウェルテル》の青年ブリュールマンの役を貰い、そこから《トスカ》のカヴァラドッシ（新国立劇場オペラ鑑賞教室公演）や《ナブッコ》のイズマエーレへと出演が繋がり、東京二期会では《仮面舞踏会》《エフゲニー・オネーギン》《椿姫》《ホフマン物語》《蝶々夫人》等で、テノールの主役級の役柄を次々と手掛けているのである。

樋口自身は、岐路に立ち、思い悩んでいた当時のことを「燻っていた頃」と言葉にしている。でも、芸術家には、そうした時期こそ必要なようにも思う。今の自分に何が出来て、これから先は何をしたいのか。彼の歌声に漲るとびきりの輝きと情熱、そしてある種の悲愴感は、そうした思索の土壌から芽吹き成長してこその、素晴らしい果実であるのだから。本盤に収録されたオペラの数々の名曲を通じて、樋口が育んできた誠実な歌心と、瑞々しく躍動感に満ちた声音を、たっぷりと味わって頂きたい。